



教職課程センターだより 第15号

2021年5月12日（水）発行・配信
尚綱学院大学教職課程センター

やさしく，ほがらかに



今日から大学は、学生の皆さんが心待ちにしていた対面授業を開始します。昨日、大学から示された「COVID-19感染防止ガイドライン」（2021年5月改訂版）の内容を十分に確認し、コロナウイルスの感染拡大防止に一人一人が十分に気を付けながら通学してください。

さて、9日（日）は「母の日」でした。皆さんは、大切なお母様やご家族とどのように過ごしましたか？私は「母の日」になると、いつも思い出す古い新聞記事があります。2000年2月18日付けの朝日新聞の記事です。当時、静岡県浜松市にお住まいだった杉本 民さんという方がお母様のことを綴ったものです。紹介します。

冬日の差す縁側で「何か歌ってくれない？」と言うと、「そうねえ」と言って、車椅子に座った84歳の母が自慢の「四季の歌」を歌った。「愛を語るハイネのような僕の恋人」とあったので、「『愛』って何？」と聞いてみた。すると、すかさず「やさしくて、ほがらかなことでしょう」と返ってきた。驚いた。

時間も季節も4人の子どものことも、おやおやと思ってしまうピントのずれた会話ばかりが日常的なので、この高尚な答えには驚いてしまった。

「愛」、それは「やさしくて、ほがらかなこと」は、心にスーッと入ってきた。「やさしいこと」は、そうありたいと常に思っているが、「ほがらかなこと」は、ついぞ忘れていた気がする。やさしく介護しているつもりでも、母には私のしかめっ面や、イライラが筒抜けに伝わっていたのだろう。

「ほがらかに」の言葉は聞くだけで浮き浮きしてしまう。ほがらかな会話、ほがらかな笑顔は、おのずとやさしいに違いない。それこそ「愛」の実践だ。

母は42歳で夫を亡くし、4人の子どもを育てた。いつも明るくて、人々の輪の中にあり、私たちを幸せにしてくれた。苦勞に違いなかったのであろうが、見えるところではいつもほがらかな母であった。

「愛とはやさしくてほがらかなこと」。この言葉は私にとって母そのものである。介護も仕事も、人付き合いも、「ほがらか」をモットーにして生きていこうと心に決めた。

私は、「母の日」には、高齢者施設（グループホーム）でお世話になっている満93歳になる義母と「窓越し面会」をしてきました。コロナ禍の影響で、1年以上も直接の面会はできずにいますが、満面の笑みで迎えてくれました。窓越しに、スマホを通して話すという面会でしたが、昔から変わらない屈託なく、ほがらかな義母の様子が伝わってきました。長寿の秘訣は、新聞記事にもある義母のほがらかさかなあと感じさせられました。

「愛とはやさしくてほがらかなこと」。このことは、教師に求められる資質・能力でもあると言えます。やさしさもほがらかさも、その人自身の心の余裕、相手を認め、尊重する気持ちから生じてくるものだと思います。教師になった時、そこには教師のやさしさとほがらかさに包まれて日々成長していく子供たちが待っています。こうした視点からも、教師になる準備を進めたいものですね。

（教職課程センター 特任教授 佐藤 佳彦）